

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 29 年 6 月 19 日現在

機関番号：12102

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2013～2016

課題番号：25370574

研究課題名(和文)日本語学習者の母語場面・接触場面を対象とした対話コーパスの構築と分析

研究課題名(英文)Construction and analysis of a dialogue corpus for Japanese learners

研究代表者

澤田 浩子(SAWADA, Hiroko)

筑波大学・人文社会系・准教授

研究者番号：70379022

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,700,000円

研究成果の概要(和文)：本研究課題では、日本語教育における会話シラバスの再検討をめざして、説明、話し合い、アドバイス、資料へのコメント、伝言、弁明、訂正求めの7つのタスク会話からなるコーパスを構築した。それぞれ、A.日本語母語話者同士5ペア、B.日本語母語話者・日本語学習者20ペア(中国学習者10、韓国学習者4、ベトナム語学習者3、欧米圏学習者3)、C.外国語母語話者同士11ペア(中国語4ペア、韓国語2ペア、ベトナム語2ペア、英語2ペア)の計252データとなる。最終的にコーパスを用いて各タスクの談話行動・言語形式の特性を分析し、会話プロフィシエンシーを重視するレベル縦断シラバスの基礎資料を提案した。

研究成果の概要(英文)：This research project constructed a dialogue corpus to optimize the Japanese conversation education syllabus. The corpus consisted of seven task dialogues: (1) explanation of travel impressions, (2) discussion on traveling transportation, (3) advice for travel, (4) comments on scholarship application, (5) message from the teacher, (6) excuse for arriving late for a part-time job, and (7) correction of other's information. We recorded the following combinations in each task dialogue, obtaining 252 data. All seven tasks dialogues comprised the following elements: (A) five pairs of conversations between Japanese native speakers, (B) 20 pairs of conversations between Japanese native speakers and Japanese learners, (C) 11 pairs of conversations between native speakers of foreign languages. Employing this corpus, we analyzed the distribution of discourse behavior and language form of each task dialogue, and proposed a syllabus based on conversation proficiency.

研究分野：日本語教育

キーワード：日本語教育 シラバス 対話コーパス 接触場面 プロフィシエンシー タスク

1. 研究開始当初の背景

日本語の研究資料として、話し言葉を対象としたコーパスが相次いで公開されており、代表的なものとして、(1)『日本語話し言葉コーパス』(国立国語研究所)口頭発表やスピーチなどの独話を収集したもの、(2)「KYコーパス」「上村コーパス」OPI テストなどの日本語運用能力を測定するためのインタビューをデータとしたもの、(3)「名大会話コーパス」雑談を収集したもの、などがある。しかし、日常場面で何らかの行為(タスク)を遂行するための会話の分析にふさわしい話し言葉のコーパスは質・量ともに十分とは言えない。ましてや、日本語教育におけるシラバスを検証する目的でコーパス設計されたものはなく、日本語学習者に対する会話研究・会話教育を深めていく上で限界があると言える。

2. 研究の目的

本研究課題では、日本語教育における会話教育のシラバスを再検討するための基礎資料として、日本語母語話者と日本語学習者、日本語非母語話者による、日常生活場面におけるタスク遂行の会話コーパスを構築する。また、作成したコーパスを用いて、データに基づいたシラバス提案のための分析のケーススタディを行う。

3. 研究の方法

・平成 25 年度：会話コーパスの設計を行い、タスク会話のためのルールカードの策定と文字化の方式の決定を行った。
 ・平成 26 年度：会話コーパスの収録に着手し、おもに接触場面の収録を行った。収録の過程で、中国語母語の学習者、韓国語母語の学習者の日本語レベルの設定について見直しを行った。
 ・平成 27 年度：会話コーパスの収録を継続して行い、おもに日本語母語話者の母語場面、日本語非母語話者の母語場面の収録を行った。経費の都合上、一部、収録ペア数を減らしての実施となった。
 ・平成 28 年度：収録したデータの文字書き起こしと翻訳、フォローアップインタビューの要点文字化の作業を行った。最終的に研究分担者間で収録データの共有を行い、分析を開始した。

4. 研究成果

(1) データ収録

4 年間の研究期間中に、当初予定していたデータ量を一部削減しての実施となったが、以下の全 252 件のタスク遂行に伴う会話データの収録を終了した。

- ・収録数 252 件
- ・タスク 7 場面： 説明、話し合い、アドバイス、資料へのコメント、伝言、弁明、訂正求め
- ・会話者属性

- A. 母語場面(日本語母語)：各 5 ペア
- B. 接触場面：各 20 ペア
 - ・中国語母語の学習者：10 ペア
(中級学習者 5 ペア、上級学習者 5 ペア)
 - ・韓国語母語の学習者 4 ペア
(中級学習者 2 ペア、上級学習者 2 ペア)
 - ・ベトナム語母語の学習者：3 ペア
 - ・欧米圏の学習者：3 ペア
- C. 母語場面：各 11 ペア
 - ・中国語の母語場面：4 ペア
 - ・韓国語の母語場面：2 ペア
 - ・ベトナム語の母語場面：2 ペア
 - ・英語の母語場面：2 ペア

(2) コーパス・データの構築

上述の 252 件のタスク会話 1 件につき、以下の情報をそれぞれ作成した。

- ・タスク会話(音声・映像)
- ・タスク会話の文字書き起こし
- ・タスク会話の文字書き起こし翻訳
- ・フォローアップインタビュー(音声)
- ・フォローアップインタビュー要点文字化
- ・話者のフェイスシート
- ・学習者の日本語レベル(J-CAT 得点)

(3) コーパス・データの公開に向けて

本研究課題で目標とするのはコーパス・データの収集と構築までであったが、今後、他機関・他研究グループとの連携を検討し、個人情報保護のデータ処置を加えたのちに、WEB サイト上での公開を行う予定である。

(4) 会話教育シラバスの再検討にむけたタスク会話データの分析

「説明」タスク

日本語母語話者・日本語学習者上位群(おおよそ上級レベルに相当)・下位群(おおよそ初中級～中級レベルに相当)の 3 群を比較した結果、以下の 3 点が特徴として挙げられる。

- a. 「説明」部分の発話の長さ(ターンが交代するまでの発話。あいづちを除く)は、日本語母語話者 日本語学習者上位群 日本語学習者下位群 の順に短くなる。
- b. ターン交替前の発話末は、「文単位」の発話末(絶対境界(いわゆる文末) / 体言止め / と文末 / 文末候補(文末表現 + 終助詞))は日本語学習者下位群の方が多く、「強境界」の発話末(「並列節 + ケド。」など)や「弱境界」の発話末(「～テ。」「～ミタイナ。」など)日本語学習者上位群、日本語母語話者が多く用いる。
- c. 質問と応答に関して、日本語学習者下位群は一問一答形式を中心に会話が進行するのに対して、日本語学習者上位群、日本語母語話者は、質問 応答 + 関連情報の付加によって会話が展開していく様子が観察された。

本分析結果からは、「自身の経験の説明」における発話量の豊富さが日本語学習者の会話レベルの印象付けの一因になっていること、また、発話量を増やすために必要な言語形式を明らかにすることの重要性を示唆している。

「話し合い」タスク

日本語母語話者と日本語学習者上位群に見られた特徴として、以下の4項目が挙げられる。

- a. 談話構成上の特徴
 - ・意見が対立する両者がお互いの意見をサポートし合いながら、話段を構成するように、それぞれの立場の意見を両者が協力的に述べていた。
- b. 言語行動上の特徴
 - ・自身とは対立する意見に対しても、肯定的な言及を行う。
 - ・自身の意見を述べる際にも、相手の立場に対して肯定的な言及を行ってからする。
- c. 話し合いの終わらせ方
 - ・一部の日本語学習者下位群が、それまでの意見を急に变えて、相手が支持する立場に同調することで話し合いをほぼ強制的に終わらせているのに対して、母語話者や一部の上位群では、「まあ、たしかに～だね」、「やっぱり～がいいのかな」等の表現を用いながら、自身の意見が相手の影響を受け、変化していく様子が分かるような話し方をして、徐々に結論に向かうという特徴が見られた。

「話し合い」というタスクは、自分の意見を言えさえすればよいというものではなく、相手の立場もサポートしながら、自身の意見の変化が相手にも分かるように話すということが、学習者にとっては、難しいポイントではないかということが明らかになった。

「アドバイス」タスク

分析の結果、日本語母語話者と日本語学習者上位群（おおよそ上級レベルに相当）には見られるが、日本語学習者下位群（おおよそ初中級～中級レベルに相当）には見られない談話行動・言語形式として、以下の4項目が挙げられる。

- a. 「アドバイスの依頼 - 受諾」から「アドバイス談話」開始までの間に生じる、質問をして相手の予定や希望を聞くようなカウンセリング発話。
- b. 「アドバイス談話」から会話終了までの間に生じる、アドバイスへの感謝や将来の約束、相手への励ましなどを行う前終結発話。
- c. < 勧め > 行動
 - ・「Nがおすすめ+ですね/なんです/かなあと思う」、「おすすめはN。」の文型
 - ・「何が有名なの? Nとか+おいおいです/ありますよ」の応答型
- d. < 情報提供・注意喚起 > 行動

・「～たほうがいい+と思います/かもしれない/ですね」の文型

このタスクのシラバスとしては、初級から中級へ、中級から上級へという2段階の差別化が有効であり、それぞれ上記の談話行動・文型の習得が重要であると言える。

また、既存の日本語教科書で「助言」表現としてよく挙げられる「～たらいい/～ればいい/～といい」は、今回のデータではアドバイスをする側の発話には現れず、アドバイスをもらう側の発話にのみ現れることが分かった。これは、「資料へのコメント」タスクにおいて、資料に対するアドバイス行動で、これらの言語形式が現れることと対照的である。

「資料へのコメント」タスク

日本語母語話者と日本語学習者（韓国・ベトナム・英語各母語話者）との比較では、以下の傾向が見られた。

- a. 会話開始部のコメントの依頼（依頼内容の確認）で、日本語母語話者の使用する従属節は「～ですけ(れ)ど」、「～て/で」に限定されていたが、日本語学習者は多様な従属節を用いていた。
- b. コメントの過程における、コメントの受け手からの内容・構成に関する質問では、日本語母語話者は「～ですかね」や間接的な質問形式（例：「～みたいなを書いていこうかなと」）を多用していたが、日本語学習者は「～か」や上昇イントネーションなどシンプルな形式による質問が優勢であった。
- c. 会話終了部では、日本語母語話者は「書き直してみます」のような「～してみる」含む今後の修正への言及が特徴的だったのに対し、日本語学習者では「また連絡します」のような今後の連絡への言及が特徴的であった。
- d. コメントの受け手のあいづちは、日本語非母語話者のほうが多様な形式を使用していたが、「ふーん」「なるほど」など相手との摩擦を生む可能性のあるものも含まれていた。

「伝言」タスク

分析の結果、伝言が行われるときに出現する発話機能には、母語話者、学習者を問わず、以下の7つが認められた。（ ）は発話例である。

- a. 行為（伝言なんですけど）
- b. 主体（山本先生に会ったんですけど）
- c. 話題（奨学金のハンコの話なんですけど）
- d. 確認（あさってハンコをもらう予定ですね）
- e. 事情（先生があさって海外出張に行くので）
- f. 要件（明日までに来てほしいと先生が言っていました）

g. 忠告（明日行ったほうがいいと思いますよ）

また、学習者の場合、次のような特徴が見られた。

- 1) 上掲の a~g の提示順序が不安定になる。
- 2) うまく伝わらないので、同じ発話機能が繰り返される。
- 3) 提示内容の足りないところを母語話者が補い、共同発話の性格を帯びる。
- 4) 母語話者が黙って話を聞いたほうが、学習者はきちんと順を追って話すことができる。

「弁明」タスク

日本語母語話者と学習者（主に母語の言語別）の談話を比較した結果、以下の5点について、表現形式や談話行動の違いが明らかとなった。

a. 談話展開

日本語母語話者・学習者いずれも「謝り理由 謝り 気遣い 謝り」の基本構造が見られ、学習者のレベル別にも際だった特徴はあまり見られなかった。ただし、学習者の母語別に見れば、ベトナム語母語の学習者は意味公式ごとにある一定の発話のまとまりが見られるのに対し、英語母語の学習者は「謝り」「理由」以外の意味公式がほとんど見られないという違いが現れた。

b. 「理由」の形式・行動

日本語母語話者、および中国語・韓国語を母語とする学習者は、「理由」を述べる発話がまとまって現れることが多く、特に日本語母語話者は節末・文末に「～て」形を使用して1発話権を長く維持する傾向が強い。また英語母語の学習者は、他言語を母語とする学習者や日本語母語話者と比べて、自ら詳細な理由を述べる行動が少ないと考えられる。

c. 「謝り」の形式・行動

日本語母語と学習者の会話には、日本語母語話者から学習者側への「不満・助言」の発話が見られる。日本語母語話者どうしの会話にはそういった発話が少ないことを考えると、学習者側からの「謝り」が十分でないことが考えられる。

d. 「不満・助言」の形式・行動

「不満・助言」の発話を行う日本語母語話者側の特徴を見ると、「理由 不満・助言」「状況確認 不満・助言」「助言のみ」「不満 助言」のパターンがあり、「理由」や「状況確認」をすることなく「不満」を述べるパターンは非常に少ない。

e. 「気遣い」の形式・行動

日本語母語話者は、相手への「気遣い」の発話がすべての談話に見られたが、中国語・英語を母語とする学習者には、「気遣い」の発話がない談話も多い。

「訂正求め」タスク

現段階で以下の3点が明らかとなった。

a. 日本語母語話者と中国語母語話者においてはおおよそ決まった型のようなものが見られ、「え？」などによる聞き返し、「間違っていない？」「～じゃなかったっけ？」などの認識の確認の促し、「～だったと思うんだけど…」などの訂正、そして訂正の確認作業が済んだことを追認するような発話がある。

b. 上記ストラテジーを遂行するために、両言語話者において、相手の間違いをストレートに指摘するというよりも、婉曲的に訂正することが多いということが分かった。このストラテジーはもちろん、他のタスクでも一貫して見られるものであるが、中国語母語話者がこのようなストラテジーをとることは興味深く、日本語を話すということによりそのようになったのかは別の研究が必要であろう。

c. コメントシートには、「印象」という用語が頻出することから、このようなストラテジーを用いて彼らがいかに印象よく訂正作業を終了することに気を配っているかが分かる。これはとりもなおさず、「印象よく話す」ということのニーズの高さを反映したものであり、今後の研究はこのような方面に展開する必要性があることを強く示唆しているものと見る事ができる。

5. 主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕(計8件)

(1) 宮永愛子「日本語学習者の雑談における協動的な語り - 効果的な語りを行うために -」『日本語プロフィシエンシー教育』4, 査読有, pp.154-166, 2016年

(2) 柳田直美「やさしい日本語の研究動向と日本語教育の新展開: 母語話者の「説明」に対する非母語話者の評価観点」『ことばと文学』4, 査読無, pp.46-54, 2015年

(3) 堤良二・楊帆・鎌田修「感情・評価的意味を持つ文とプロフィシエンシー」『日中言語研究と日本語教育』8, 査読無, pp.38-48, 2015年

(4) 石黒圭「書き言葉・話し言葉と『硬さ/軟らかさ』」『日本語学』34-1, 査読無, pp.14-24, 2015年

(5) 柳田直美「議論の場における「他者発言容認の前置き表現」使用の縦断的变化 - 中国人日本語学習者の場合 -」『一橋大学留学生センター紀要』5, 査読無, pp.49-63, 2014年

(6) 宮永愛子・松田真希子「聞き手配慮要素からみた超級日本語話者の発話の特徴」『日本語・日本語教育研究』5, 査読有, pp.107-123, 2014年

(7) 澤田浩子「知覚・思考・判断・意志を表す「文末名詞文」の使用実態 - コロケーションから文型へ」『日本語・日本語教育研究』5, 査読有, pp.57-73, 2014年

(8)永井涼子、南浦涼介「大学授業において留学生と日本人学生は共に何を学べるか 留学生教育と社会科教員養成をつなぐ試み」『大学教育』11, 査読無, pp.50-67, 2014年

〔学会発表〕(計3件)

(1)俵山雄司「資料へのコメント場面におけるコメントの受け手の言語行動」第7回ダウンタウンセキコロキアム, 2016年12月23日, 山形テルサ(山形県山形市)

(2)柳田直美「日本語母語話者の「説明」に対する非母語話者評価の尺度開発」日本語教育国際研究大会2016, 2016年9月10日, BNDCC(インドネシア, バリ島)

(3)宮永愛子「日本語学習者の雑談における語り-協動的な発話連鎖に注目して」第19回ヨーロッパ日本語教育シンポジウム, 2015年8月28日, ボルドー・モンテーニュ大学(フランス, ボルドー)

6. 研究組織

(1)研究代表者

澤田 浩子(SAWADA, Hiroko)

筑波大学・人文社会系・准教授

研究者番号: 70379022

(2)研究分担者

俵山 雄司(TAWARAYAMA, Yuji)

名古屋大学・国際交流本部国際言語センター・准教授

研究者番号: 30466685

柳田 直美(YANAGIDA, Naomi)

一橋大学・国際教育センター・准教授

研究者番号: 60635291

永井 涼子(NAGAI, Ryouko)

山口大学・国際総合科学部・准教授

研究者番号: 10598759

宮永 愛子(MIYANAGA, Aiko)

山口大学・大学教育機構留学生センター・講師

研究者番号: 70707629

堤 良一(TSUTSUMI, Ryouichi)

岡山大学・社会文化科学研究科・准教授

研究者番号: 80325068

庵 功雄(IORI, Isao)

一橋大学・国際教育センター・教授

研究者番号: 70283702

石黒 圭(ISHIGURO, Kei)

大学共同利用機関法人人間文化研究機構

国立国語研究所・研究系・日本語教育研究

領域・教授

研究者番号: 40313449